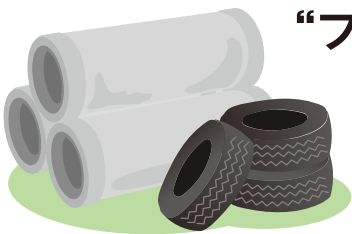


「子どもたちの遊び」を守る冒険遊び場 “プレーパーク”



ネットの普及で子どもたちの遊びが様変わりしている。塾や習い事で忙しい子が増え、子どもたちの集合場所は限られた場所になった。屋外はもとより友達の家に行くこともなく、自宅でネットに時間をゆだねる。

リアルな体験は架空のネット空間へと移行し、かつて異年齢の子どものちが遊びを共有していた屋外の公園に子ども姿がほとんど見当た

らなくなった。先月、サンプラザ生涯学習センターで、神戸女子大学の梶木紀子教授が「子ども遊び」について講演があり、プレーパークの紹介があった。

プレーパークとは、冒険遊び場の別称で、発祥はヨーロッパ。お仕着せの遊び場と違い、古々

イヤを積み上げただけの公園で、一見無秩序のように見えて、子どもたちが想像力を働かせて遊びを工夫することが出来る遊び場。「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、子どもが自分たちのスタイルで楽しみ、発見・創造する喜びを味わうのが、プレーパークの哲学である。日本では、1979年、世田谷区の国際児童年記念事業として開始された。開設当初から区と住民との協働で、今なお先進的な取り組みとして全国的にも注目されている。梶木さんは「早期教育のひずみは大人になって出ることがある。危ない、汚い、うるさいと子どもの遊びに社会の寛容性が失われ、遊びの中でしか得られない五感も損なう。心地悪いかから心地いいが判る。排除するだけではリスクハザードの感覚も磨かれない」と語る。SNSによる犯罪が多発する現在、考えさせられる問題である。